

〔時慶卿記〕慶長十年二月廿五日、晚ニ雷鳴、入夜ハ光帯タ、シ、初雷ナレバ節分大豆ヲ用、

〔貞丈雜記十六〕一節分の大豆を取て置て、初がみなりの時、くひつむ事、今の世のならはし也、京

都將軍の御代には、節分の大豆を取て置て、二月初午の日に參らせし由、年中恒例記にみへたり、

〔甲子夜話二〕先年ノコトナリ、御城ニテ予九鬼和泉守國ニ問ニハ、世ニ云フ、貴家ニテハ節分ノ夜、

主人闇室ニ坐セバ、鬼形ノ賓來リテ對坐ス、小石ヲ水ニ入レ、吸物ニ出スニ、鑿々トシテ音アリ、人

目ニハ見エズト、コノコトアリヤト云シニ、答ニ、拙家曾テ件ノコトナシ、節分ノ夜ハ、主人惠方ニ

向ヒ坐ニ就バ、歳男豆ヲ持出、尋常ノ如クウツナリ、但世ト異ナルハ、其唱ヲ鬼ハ内、福ハ内、富ハ内

トイフ、是ハ上ノ間ノ主人ノ坐セシ所ニテ言テ、豆ヲ主人ニ打ツクルナリ、次ノ間ヲウツニハ、鬼

ハ内、福ハ内、鬼ハ内ト唱フ、此餘歳越ノ門戸ニ挾ムヒ、ラ木、鰯ノ頭ナド、我家ニハ用ヒズトナリ、

コレモ亦一奇ナリ、

〔續狂言記五〕節分 女わらは、此家の女房でござる、今夜は節分でござるによつて、こちの人は

出雲の太社へ年籠りに參られてござる、表もうらもさいてよふ留主致しませふ、

〔比古婆衣三〕口女 神代紀海神宮の段に、火々出見尊御兄火酢芹命の鈎を失ひ給へる由を海神

のき、て、魚どもを集て、覓得たる事を載られたる一書の中に、海神召赤女口女問之時、口女自口

出鈎以奉焉、赤女即赤鯛魚也、口女即鰯魚也、また一書に、亦云、口女有口疾、即急召至探其口所失之

鈎立得、略 中 土佐日記元日の條に、今日は都のみぞおもひやらる、こゝのへのみかどのしりく

め繩のなよしの頭ひ、らざら、いかにとぞいひあへるとあるは、そのかみ、かの口女の喉の鈎の

ために、痛み疼きたる古事によりて、元日にかの魚の頭と、杠谷樹を宮門に挿れたりしなるべし、

挿終鰯門戸

略 中 近むかしよりの世の風俗に、春の節分の前夜、雛すとて、鰯とひ、らぎの枝を葉ごめに門戸